2007. 12. 13.

おーい図書館

No126
発行 おーい図書館
代表 青木和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL 047-311-0886

講演会
「子供が算数好きになるとき」を聴いて
黒沢智子

講師は、元自由の森学園長で「算数たんけん」(偕成社全8巻)の著者でもある数学教育研究者の松井幹夫さん。

はじめに、「小学1年生に算数を楽しんでもらうのも、高校3年生に数学を楽しんでもらうのも、根本は全く同じなんですよ」と話し出した。

"わからない、算数きらい"と逃げ出してしまう子ども達に、算数の楽しさや計算する楽しさを紙芝居やタイル・サイコロなどを使って「算数好き」になるようにわかり易く教えている松井さん。これまで行ってきた様々な実践の中から幾つかの方法を実際にやってみせながら、算数と仲良しになる術を話してくれた。

早速、5つのタイルを使って、数のとらえ方を説明。「視覚による言語として5の固まりを使うと、計算がし易くなるんですよ。」と、紙芝居『ヘンシーン』で説明。穏やかな語り口による「合体へんしーん」の話に、「なる程、そうか!」と、数の計算の仕方の面白さに改めて感心してしまう。

小学1年生が初めて習う算数・数の計算もこんな風に視覚から入れば、算数嫌いではなくむしろ算数好きになるのになあと感じた。

「算数にはツボがあるんですよ。その大事なツボを楽しく教えると、好きになりますよ」と松井さんは例を出した。

子ども達にとって難解なものの一つに、割合がある。「割合は1が動くもの」と松井さん。自作のゴムを利用した物差しで、実際に手元にあった紙を計って見せてくれた。「縦を1として、横を計ると…こんな風に割合が出ます」と指し示してくれる。身近なもので割合を計ることで知らず知らずのうちに算数に親しめる。松井さんの言う「計算抜きで割合が存在することを知ると子ども達は楽しくなるんですよ」に同感!なんだか楽しくなってきた!!!

松井さんはこれまでも今も、算数教育に熱心に取り組んでおられる。小学校低学年や障害児の算数

教育では、先ず、遊びを通し、目で覚えさせることを独自の教育理念として実践されてきた。初めて〝かず〟を勉強する子ども達にとって、1から10までの計算は簡単なようで難しいこと。でも、きちんと教われば、その難しさも楽しく理解できるようになる。

算数の原点となる部分が聴けて、子どもが算数好きになるきっかけ作りやヒントを教わり、その基本の大切さがしみじみわかったような気がした。小さいお子様を持つお父さんやお母さん、また、今現場にいる先生方に、ぜひ聴いてもらいたいお話でした。

伊藤和子

我が家では孫も大きいので、算数の話はもういいか？と、最初は気乗り薄だったのですが、松井さんという本物の自由主義者（古い言い方デス！）のお話が聞きたくて、出かけました。

優しいけれど断固とした老神士（80才）。「ベトナムが大好き！世界で唯一、アメリカに屈服しなかった国だから」と言われたのにはびっくり！（小田実さんに聞かせたかった！）また「フィンランドでは、コンビニの数ほど図書館がある」と。4月定例会でフィンランドの教育事情をビデオで見たばかりなので、「なる程！」と納得。フィンランドの子供達の学力が上がり日本が下がったのも当然です。一人一人の子供を大事にしなくて、どこに教育という場があるのでしょう？

松井さんのように、手間暇惜しまず子供の目線と向き合った丁寧な教え方をすれば、算数に限らず、どこかで躓いている子供達がどれほど救われるか？

若いお母さん方や日々子供達と格闘している先生達にも、ぜひ聞かせてあげたかった。教育委員会等で、新任教師の講習などに、松井先生をお呼びすればよいのに…

算数がきちんと判ることは、その子の将来に関わる問題なのだ。と…本当にそうだと思いました。

お話を聞いているうちに、昭和30年代に遠山啓さん達の「水道方式」が紹介された頃、私も一年坊主の算数に悪戦苦闘していましたから、早速授業に取り入れたことなど…遠い〈昔を懐しく思い出しました。その時、タイルの裏に糊がついていれば、黒板に貼り易いのになぁ！と思った事なども、フッと思い出しました。

松井さんのように丁寧に教えた覚えはないけれど、8＋5＝103と書く子供は毎年いて、位取り・繰

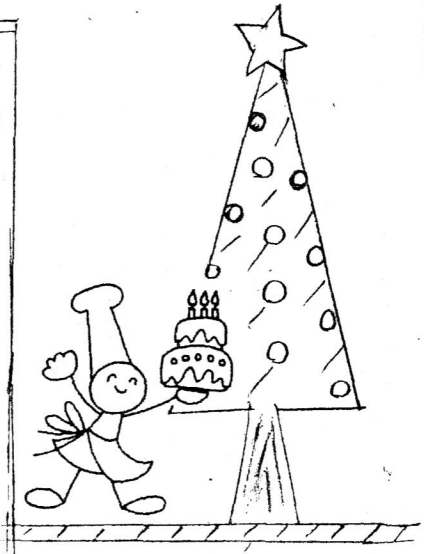
上り・繰下りを飲み込ませるのは結構大変でしたから、その頃松井さんにお逢いできれば良かったのに…「遅かりし由良之助」でした。

久しぶりにお聴きした本物の自由人のお話は面白く、VDの自由の森学園卒業式の合唱の場面など、涙がこぼれました。

あんなに力いっぱい歌うことのできる、「生徒のための生徒が作り上げた」素晴しい卒業式が存在するなんて！うちの息子も甥も都立高の教師で、石原都政下で苦しんでいる姿を垣間見ていますから、余計心に沁みたのかもしれません。

終了後のお茶の席で話された藤田恭平さんのお話も感動的でした。夜間中学を始められた頃、教師の側からの「先生と呼ばないで、お互いにさん付けで…」との提案に、オモニの一人から「今まで、先生と呼ばれる人に教わったことがない。先生と呼びたいのだ！」と食ってかかられたこと。また、個人指導がし易いから、先生と生徒が一対一で向き合う形にしようと思ったら、別の男性から「それは違う！教室という所は、黒板があって先生がその前に立つ。その前に机が並んでいて生徒は座って聞く。そのイメージを壊さないでくれ！」と詰め寄られたこと。この二つのエピソードは、改めて教育の原点とは何か？と考えさせられます。

我々が当たり前だと思っていることが、どんなに恵まれた状態なのか？それを知らないで、何事も表面的というか、勝手な思い込みで世の中を見過ぎていないだろうか？と、つくづく反省させられた一刻でした。



投稿

図書館讃歌

松戸市議　山中啓之

忙しい時ほど本が読みたくなるのは、私だけではない筈だ。9月議会も終盤の大詰め（決算審査3日目）の今、この文章を書いている。

政治家と縁のないサラリーマン出身の私は、昨年11月にいわゆる「ジバン・カンバン・カバン」無しで市議選に出た。唯一あるのは政策のみ。その目玉の一つに「図

書館政策の推進」を大きく掲げた。松戸市の公立小中学校で育った私は、市の図書館をわりとよく使ってきた。だから、図書館の充実を訴えたのは、住みよい街づくりを目指す上で純粋に「必要だ」という、一住民としての想いからくる自然な発露だった。

―「もっと蔵書数を！そして開館時間の延長を！」―

こう訴えていた私は、市議になった後の視察や研修で、自分の無知を痛感する事になる。

浦安市の図書館を見た時の衝撃は、筆舌に尽し難い。松戸とは完全に『別モノ』だった。図書館を見ればその街の文化レベルが分かると誰かが言っていた。私は気付いた―単に蔵書数や開館時間の違いだけじゃない！見渡す限りの開放的な空間に、柔かな自然光が届き、赤ちゃんからお年寄りまでが、楽しそうに活き活きと過ごしている。充実した雑誌コーナーやレファレンス、ところどころにさりげなく閲覧用の椅子。読むだけじゃない、散歩するもゆっくり寛ぐも自由な空間があった。あぁ、これでも無料なのか。浦安市民に嫉妬したこの日(!)を境に、私の『図書館観』はガラリと変わった。そして、松戸市の図書館を何とかしたいと思うようになった。

その後も、我孫子市・市川市と図書館視察を重ねた。元浦安市立図書館長の常世田良氏からは大変貴重なお話を頂き、書籍やセミナーで「図書館」というものを模索するにつれ、想いはより強い確信に変わった。…今の松戸市立図書館には、不十分なところがありすぎる！しかし、一体どこから手をつければ良いのだろうか…。

それでも、やれるところから始めねば。理屈だけこねて実行しない政治家にはなりたくないと言っていた1年前の自分が、どこかで今の自分を見ている気がした。今までの情報を整理して纏め、他市との比較資料や必要な数値データを集めた。市の第3次実施計画なども挙げて、現在私が持ちうる限りを総動員して、9月議会の一般質問の場で『市長の考える図書館像は何か』を質問した。

質問の詳細は議事録にあるので書かないが、細かい各論よりもまずは理念―図書館像―が必要だと思う。答弁では「図書館は生涯学習の場」であるとの事だったが、その理念にまだまだ『太い柱』が無いように感じた。

しかし、一般質問のヒアリング（市役所の職員との質問内容のすり合わせが事前にある）の中で、職員の一人が「ここ数年は、以前

よりも図書館への市民からの要望が大きくなっているのを、肌で感じています」と言っていた。

時間はかかりそうだが、私は諦めずに図書館政策に取り組みたい。そして10年後か20年後か、ステキな図書館で自分の子どもに読み聞かせをするのが夢である。（…その前にまずは奥さん探しからだが）

小中学校は運動会シーズン。運動場では子どもたちが元気に走っていた。昔から松戸市がスポーツや部活動に力を入れていることは、ご存知の通り。今日の議会では、市の生徒が県大会に出場した数が過去最多だとも言っていた。文武両道。スポーツ同様、文化も欠かせない。特に生涯教育だ。人口500万のフィンランドは気付いた。50万人弱の松戸市にも、早く気付かせたい。

（9月25日）

ご案内が遅れましたが

松戸市立図書館長に

高野吉雄さんが、4月から就任されました。

前任の山崎陽司さんは、4月から生涯学習本部企画調整室長に就任されました。

お二人の今後のご活躍を期待しております。

「市民がつくる図書館・全国集会」報告

青木和子

10月29日(月)～30日(火)、第93回全国図書館大会が東京で開催されました。その協賛事業として、「市民がつくる図書館・全国集会」（図書館友の会全国連絡会の交流会）が、28日(日)に日本図書館協会で開かれました。北海道から九州までの38団体、90余名が参加しました。

指定管理者制度導入を阻止した静岡市・堺市からの報告の後、各参加者が2分間(!)のスピーチを行いました。その中で、守谷市の「図書館と歩む会」から「図書館協議会が指定管理者制度導入反対の答申をまとめた」との嬉しい報告を聞くことができました。

29日(月)は、20数名の参加者が二グループに分かれて、文教関係の国会議員と文部科学省・総務省を訪ね、「公立図書館の振興を求める要望書」と「中央教育審議会を含む諸会議の傍聴について（要望）」を手渡しました。

「要望書」は6頁に掲載します。（要望理由の詳細を知りたい方は青木まで）

2007年10月29日

文部科学大臣　渡海紀三朗様
総務大臣　増田寛也様

図書館友の会全国連絡会
代表　佐々木順二
東京都板橋区高島平３－１０－２１－１０３
その他賛同２４団体

公立図書館の振興を求める要望書

私たち「図書館友の会全国連絡会」は、公立図書館が地域の情報拠点として発展することを願い、各地で活動している団体・個人の全国連絡組織です。

私たちは、２００６年５月、総務大臣及び文部科学大臣に「公立図書館の充実と改善を求める要望書」を提出しました。しかし、それらの要望事項はまだ実現していません。加えて、地方財政の逼迫は進み、公立図書館の危機的状態はさらに深まりました。公立図書館の充実と発展のため、再度、下記のことを要望します。

きたる１２月末日までに、図書館友の会全国連絡会代表に文書でご回答くださいますようお願い致します。

要望事項

１、「文字・活字文化振興法」第七条第１項に基づく公立図書館の設置、第２項に基づく司書の充実、図書館資料の充実、情報化の推進等について、実効ある施策を実施して下さい。

２、地方財政の危機による公立図書館の崩壊を避けるために、図書館の施設、設備に要する補助金・交付金等の措置を早急に行ってください。

３、公立図書館の管理・運営を民間企業等にゆだねる「指定管理者制度」は、「地方および国の行政機関が責任を持つ」(ユネスコ公共図書館宣言１９９４年)とした世界共有の図書館理念になじみません。同制度を公立図書館に適用しないようにしてください。